逆高校デビュー

神越優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逆高校デビュー

【Ｎコード】
Ｎ６２９６Ｄ

【作者名】
神越優

【あらすじ】
中学時代、その喧嘩の強さで名を馳せた、鬼人・斎藤悠樹は、いわゆるヤンキー生活に嫌気がさし、真面目な学生になるため偏差値７０の有名私立高校に入学する。幼い頃から喧嘩っ早い性格のせいで悪ガキとして育った彼にとって、真面目とは憧れでもあり、なによりも難しいことで・・・？波瀾万丈の逆高校デビュー！！

プロローグ（前書き）

どうも、神越優です。まず初めに、この作品には主人公の設定上、ヤンキー・・・いわゆる不良を卑下するような部分が多々出てきます。決して、作者自身が不良を忌み嫌っているわけではありませんが、気分を害される方は、ご遠慮くださいませ。あくまでフィクションですので・・・　本作品は、シリアスを書き続けてテンションガタ落ちになったのも有り、春らしく皆さんが楽しく読め、作者自身も楽しく書ける作品をと思い、書き始めました。是非、楽しくお付き合いいただけると幸いです。では、逆高校デビューをお楽しみくださいませ！

プロローグ

桜が咲き乱れた、三月中旬。世界で問題になっている環境問題の影響はここ日本にも及んでいて、いくらばかりか桜が咲く時期が例年よりも早くなっている。

―――こりゃぁ、入学式には桜散ってんじゃねぇか？

黒い学ランの上着に張りついた、桜の花びらを手で摘んでみる。

「悠樹さん！ご卒業おめでとうございやす！」

同じく学ランに身を包んだ少年が話し掛けてくる。少し幼さの残る顔立ちだが、堀が深く、目は大きいし鼻が高い。少し長めの茶髪の隙間から、やたらでかいピアスの穴が開いた左耳が覗いている。

「龍也・・・だっけ？」

「うっす！約束の物、いただきに来ました！」

背筋を伸ばして大きな声を張り上げる。声変わりが始まったばかりのまだ高い声は耳障りだ。

「あぁ、くれてやるよ」

鼻で笑いながら、背中に龍の刺繍の入った学ランの上着を脱いで渡してやる。昇り龍の脇には、史上最強と鬼人降臨の文字が金の刺繍で刻まれている。もう必要ないものだ。

「あざっす！光栄っす！」

「しっかりやれよ。うちはこれから狙われるからな」

一代でこの県内最強の座まで昇り詰めた福田西中学も、トップの人間が卒業した後、おそらく恨みを持った他校に一斉に襲われるだろう。卒業は避けられないから、今後はこの次期頭、龍也の手腕によって命運は決まる。少し心配だが、俺には関係ない。

―――そう、俺にはもう関係ないんだ・・・

白いYシャツに、桜の花びらがまた一つ舞い落ちた。

第一話『誕生』

――――四月上旬――――

携帯がバイブレータと共にけたたましい音量で朝を告げる。アラームの曲目は、お気に入りのＨＩＰＨＯＰシンガーの春をテーマにしたハイテンポの曲。ラップを随所に含みつつ、メロディーが心に響く最近のＪ－ＰＯＰではよくある曲だが、ラッパーの韻の踏み方が絶妙で、リリースから何年も経った今でも、春のアラームはこれにしている。

随分と暖かくなった今では、布団から出るのがさほど苦ではない。敷布団を片付け、寝巻きとして愛用している黒のスウェットのズボンに手を突っ込みながら、２階にある自室を後にする。５年程前に建て直した我が家の階段は、今でも小奇麗なままだが、如何せん家族全員が多忙なせいで、うっすらと埃が積もっているのが気分を害する。

「はよ・・・」

リビングの扉を開け、寝起きの身体から声を絞り出し、中途半端な朝の挨拶。

「あら、おはよう」

早くもリビングと繋がっているキッチンで食事の支度をしている母の姿があった。

「今日は学校の入学式前のオリエンテーションよね？お弁当持ってくでしょ？気合入れて作っちゃったわよ」

眠気覚ましのコーヒーを煎れてくれながら、少し皺が刻まれ始めた顔を緩ませて笑う母は、なんだか嬉しそうだった。

――――それもそうか。

自分の中で勝手に自己完結して、自嘲する。母が喜ぶのは当たり前だ。なんと言っても、俺が通うことになった学校は、偏差値７０を

超える有名私立大学付属の高校だ。関東６大学に名前を連ね、小・中・高と付属学校を持ち、その何れかに入学することができれば、大学推薦決定みたいなものだ。まさか、その辺の公立高校に通って、悪事を働くと思われていた俺が、そんな高校に受かり、ましてやお坊ちゃんやお嬢様と共にその学校に通うなどと、親といえども想像できなかっただろう。

「サンキュ。朝飯はパンかなんかでいいよ。シャワー浴びてくる」

少し照れくさくなったのもあって、リビングを後にして、シャワールームに向かう。戻ってきた時の母親の顔を想像すると躊躇してしまうが、決行せざるをえない。俺は、今日から変わるんだ。

鏡の中の自分を見る。下は少し緩めのデニムパンツ、いわゆるダボG。これしか持ってないからしょうがない。上は白いワイシャツにネクタイ。ストライプの柄が入った、太目の黒。そして、顔。母親譲りの細い吊り目はどうしようもない。眉毛は、卒業以来一切手入れしなかったおかげで、全く無いと言っても過言ではなかったのに、今では形になっただろう。そして髪型。色は、真っ白に見えるほど抜いていたものを、黒染めのブリーチで真っ黒になり、ワックスとハードスプレーで、絵に描いたような七三。巷で流行っている、お兄系とかの七三では、当然ない。トップの部分は完全に潰し、まさに一昔前のサラリーマンのような七三なのだ。

―――完璧じゃね？！

なにが完璧なのか。決まっている。どこをどう見ても、今の俺は真面目だ。１５年と少し、常に真面目で生きてきた、真面目の中の真面目。そう、真面目な青年だ！昨日までのどこからどう見てもチンピラ街道まっしぐら！県内最強！鬼人・斉藤悠樹ではない。どこからどう見ても真面目！あぁ真面目！！勉強最強！学級委員（自称）斉藤悠樹だ！

早起きした甲斐があった。ここまで理想通りになるとは！鼻歌混

じりにリビングに向かう。

皿が割れた。忘れていた。驚くであろうと予測していたのに、あまりの喜びと感動で忘れてしまっていた。穏やかそうな垂れ目は見開いて、形の良い唇は裂けんばかりに開かれて、驚きのあまり言葉も出ない。そんな感じか。

「どうされました、お母様？」

「――――おが・・！」

今度は少し言葉が出たな。

「お怪我はありませんか？大事な身体なんですから、傷が出来たら大変ですよ」

これは追い討ちになったか？でも、ニュー悠樹の誕生だ。いくら驚かせたからと言って、もう後戻りは出来ない。突っ走ってやる。

「・・・あんた・・・薬をやったね？！」

・・・ハァ？

「あれだけ薬はダメだって言ったのに・・・もう人生お終いよぉ・・・お父さんになんて言えばぁ・・・そもそもおかしいと思ったのよぉ！！あんたが星雲大付属に行くって言うだなんてぇ・・・うぅぅ・・・」

人を薬中扱いですか？お母様。息子をラリッてるって決め付けるあんたのがラリってんじゃねぇのか？！あぁん？！

「お母様。薬はやってませんよ。悠樹は正常でございます」

「その喋り方がラリってんじゃないのよ！！もうお終いよぉ・・・おぉぉ・・・」

「ラリってね！・・・いやいや、ラリってませんですよお母様。そろそろ冗談は止めて、朝ご飯に致しませんか？」

「もう！お終いよぉ！！！・・・おぉぉ・・・」

この後、結局俺は切れてしまい、オールド悠樹に戻ってしまった。・・・やれやれだ。

第二話『初登校』

「で、結局その格好はなんなの？」

素に戻った俺の姿を見た途端、マジ泣きしていた母はコロリと態度を変え、朝飯であるトースターを用意してくれ、俺の目の前に座っている。あれから15分くらい経ってしまった。埼玉県にある我が家から、都内にある学校まで約1時間。現時刻は7時。今日の登校時刻は9時だからまだギリ間に合う。飯は食えるな。

「言ったでしょうお母様。悠樹は今日から真面目になります」

母の眉間に皺が寄る。・・・マズイ。

「やっぱりラリって・・・」

「ないからお袋」

結局素で喋らなきゃいけねぇのかよ・・・ッタレが！

「じゃぁなんで急に『真面目になる』なのよ？！」

コーヒーカップをテーブルに勢いよく叩きつける。プラスチックのカップだから割れはしないが、ガラス製のテーブルは割れるんじゃないか？

「・・・どうでもいいだろ？お母様」

「やっぱり――――」

「しつけぇよ！！」

朝から疲れる・・・ハァ。

愛すべき築5年の我が家は、駅から1キロも離れていないところにある。閑静な住宅街ではあるが、時たま線路を走る電車の音が耳障りなのが玉にキズだ。Yシャツの上に親父のスーツの上着を勝手に拝借して羽織り、中学時代に先輩から譲り受けた（戦利品）スクーターで駅に向かう。細い道の割に、駅から近いせいか裏道として

利用する車が多いが、走り慣れた道なので問題ない。
―――待て。真面目な悠樹様は無免許運転などしてはいけないのでは？
いや、今日は不可抗力だ。あのお母様のせいで遅刻しかねん状況だ。お母様愛用チャリじゃ予定している電車に間に合わない可能性がある。なんとしても７時３４分発の急行に乗らなくては遅刻だ。次から無免許は止めよう。

それにしても、この時間の駅は人が多い。出勤時のサラリーマン、女子高生、部活をやってそうな男子高生ってところだろうか？まだ本格的に学校が始まってる所は無いはずだからな。なぜ、学校がないのに女子高生が制服で電車に乗るのかは考えてもわからんから考えない。

―――ん？あの昇り龍の刺繍は・・・

駅の改札の目の前で人が多いのにも関わらず、一人で突っ立っている少し幼さの残る顔。でかいとは言えない身長。時代遅れのボンタン。そして・・・史上最強・鬼人降臨の金色の文字に挟まれた昇り龍・・・おいおいぅをい！なんかこっち見てるぞ！めっちゃガン飛ばしてるぞ！
「ぅをい、クソガキ・・金出せよ？あぁ？！」
カツアゲっすか坊やぁ・・・声変わりしきってないから迫力ないですよ坊やぁ・・・
「てめぇダセェ七三しやがってクソガキぃ・・・こっちこいやてめぇ・・・」
クソガキぃはあんたですよ坊やぁ・・遅刻しちゃうだろうが坊やぁ・・・
―――ん？待て。こいつ今ダセェ七三って・・・
「誰の頭がダセェ七三だゴラァ！！」

馬鹿な後輩、龍也に怒りの鉄拳をかました後、俺は改札を走り抜け、電車に飛び乗った。

――今朝の犯罪（現時点で）――

・無免許運転
・暴力
・無賃乗車
・駆け込み乗車

にしても、あいつ・・・こんな所で何やってたんだろ？

第三話『ギャル』

埼玉県北部から、東京都の豊島区にある池袋駅までを走っている私鉄線。窓から視界に入ってくる風景は、時にスーパーやデパート等が目につくも、住宅街が圧倒的に割合を占めている。数年前までは空き地が多く、草木が無駄に生い茂った野原しか見えなかったらしいが、そんなことは微塵も感じさせない。

今度は車内に視線を移す。本格的に学生達が通学していないせいか、朝のラッシュ時の割に人は多くない。さすがに座席は満席で、立っている人の方が多いが、サラリーマンのおっちゃんの新聞紙が顔に当たったり、目と鼻の先でガムをクチャクチャやられる程ではないので助かった。

ふと、車両間を行き来するための通路が視界に入った。通路の中では、同じか少し上ぐらいの歳に見える女の子が二人、煙草を吸いながら座り込んでいた。服装は、うちの中学からも何人か受験していた、某有名公立高校の制服。なぜ有名か？そこまで偏差値は悪くないのに、入学するのはギャルとヤンキーばかりだからだ。

―――ギャルが！電車の中でヤニなんか吸いやがって！

短めのスカートを履いてるくせに、あぐらをかいて下品な笑い声をあげている。肌は日焼けサロンで焼いているのだろう、春に入ったばかりなのに真っ黒だ。君たちだけ夏を先取りか！

突然だが、俺はどうもこのギャルという人種が苦手だ。見た目で全ての人の性格が決まるわけではないが、主にギャルの方々の性格はテンション高めのくせにダークなのだ。口が悪い上にネチネチと陰口を言い合って楽しむ。人の悪口で、なぜあそこまで楽しめるのかわからん。

去年のちょうど今頃、俺が最もヤンキー活動を盛んに行っていた時、なぜか各中学のギャルに人気が出始めた。駅前をぶらついていると、こっちは顔も名前も知らないのに、馴々しく声をかけてくる。

翌日、学校に行くと、覚えのない噂話が広まっていた。
――斎藤悠樹は、喧嘩は強いがあっちは下手。
待てと。俺は自慢じゃないが女と関係を持ったことなんかないぞと。しまいには、同じクラスのギャルが、
「ね、教えてあげようか？」
とか言ってくる始末。結構です。全力で結構です。
普通の男だったらまず喜んで食い付くところだったのだろう。だが、俺は普通じゃない。その辺にいるギャルに誘われたってなんも感じない。
そう！俺は！！髪は三つ編み・肌は色白・眼鏡はあってもなくてもいい・的な学級委員の女がタイプなのだ！！
別に変な趣味があるわけではない。ただ、そういう真面目な女の子と、学級委員を共にがんばりながら芽生えていく恋を楽しみたい。そう！純愛をしたいのだ！！

「あのぉ」
一人妄想にふけっている時、少し高めのダルそうな声が聞こえてきた。そこで意識は現実に引き戻され、視界にはさっきのギャル二人が目の前に・・・
「あのぉ・・・斎藤悠樹さんですよねぇ？鬼人の」
どうやら俺に話し掛けているようだ。
――待て。待て待て待て。
乗車ドアの窓に映っている自分の姿を見る。うん、完璧だ。完璧な真面目悠樹だ。
「違いますぅ？目元が似てるんですけどぉ」
「だから違うってぇ！こんなキモい七三なわけねぇじゃぁん」
切れるな俺。耐えろ俺。
「でもホント似てんじゃん？背も同じくらいだしぃ」
おい、声高子（こえたかこ。名付け親、俺）しつけぇよ。
「あぁ、たしかにそんな背高くないほうだよねあいつ。の割に喧嘩

強いとかどんだけチビマッチョなんだしぃ」
お前は声しゃがれてんな。じゃぁ声しゃが子。お前殴っていいか？
「ほらぁ！この人もチビマッチョじゃん？！ねぇ、やっぱ鬼人さんですよねぇ？」
だからギャルは嫌いなんだ！いきなり話振って来やがって！がんばれ俺！お前はできる子のはずだ！
「ち・・・違います・・・人違い・・・です」
―――できるじゃん俺ぇ！できる子じゃん俺ぇ！今のは完璧ギャルにびびった真面目君じゃねぇ？！
「あっそ。ほら、茜違うって。行くよ」
「えぇ～・・・ん、行くぅ・・・」
行った・・・行ってくれた。なんでバレたんだ？
―――目か！目元が似てるって言ったよな！そっか、眼鏡をかければいいんだな。今日みたいなのはもううんざりだし、眼鏡を明日からかけよう！フフフ、これで更に完璧な真面目君に―――
「あのぉ？」
―――またか、声高子！どうする？！さすがに今は眼鏡なんか持ってないぞ！
困った俺は名案を思い付いた。
両手の親指と人差し指で二つの円を作り、それを・・・
目に当てた。
「・・・なんでもないです」
声高子こと茜と呼ばれたギャルは表情を歪めて逃げるように車両間通路に引き返した。
―――ハッハッハ、勝った！！！

第四話『学校』（前書き）

更新遅れてしまい申し訳ありません。理由は後書きにて。作中に登場する、学校名・建造物・人物名は架空の存在です。ここで改めて注意させていただきます。

第四話『学校』

終点で電車を降り、人が多すぎて前も見えない駅を歩く。小さめな身長の俺にとって、慣れない駅でこの状況は大変困る。天井近くの案内板を頼りに、西口に向かう。それにしても、これから毎日これが続くなんて想像したくない。暖かくなってきたのもあり、人ゴミの中だと汗が出てくる。暑い。ムサい。前が見えん！

西口の階段を昇り、地下を出ると、思わず手をかざしたくなるような快晴が待っていた。時刻は８時４５分。日が大分昇り始めたのだろうか？空を見ると一面、青、青、青、時たま眩しい。

―――ってか待て。うん待て。遅刻じゃね？！

駅からだいたい徒歩１０分。校門を入って、教室を調べて辿り着くのに１０分。・・・うん、７分の遅刻だね。９時からだよね。遅刻だよね。

―――真面目君が初日に遅刻するか！！

俺は学級委員になる夢を守るために、全力で走った。

私立青雲大学付属高等学校。関東６大学に名を連ねる、青雲大の付属高校。創立者は、呉西太吉（くれにしたきち）という、大正時代に名を馳せた有名な政治家だ。具体的に何をしたか等は後々説明しよう。

とにかく、この青雲大付属は、歴史が長いだけに何度も増築・改築を繰り返しているので、とにかくでかくて綺麗だ。校舎は２つあり、体育館・グラウンドも２つ。更に講堂・食堂。つまり、建物が６つとしかもグラウンドが２つあり、それらが収まる程の敷地を持っているのだ。ここは大学ですか？！どんだけ金持ってんだこの学校。

３年前に男子校から男女共学になったこともあり、ただでさえ人気があったのに俺が受験した年では、倍率８倍を叩きだした。
ちなみに、今年の入学者は総勢７００人。男子・女子共に３５０人ずつ。これまた高校ではなかなか見られない数字だろう。

さて、今俺は中庭にいる。この学校は、正門から入って右側に新校舎。左側に旧校舎。その中間地点に中庭が設置されている。桜が両端にあり、春には咲き乱れ、とても美しいはずだが今は既に緑が豊かになっている。その足元には色とりどりの花が並ぶ花壇。花壇の前には多数のベンチが並んでいる。そして、それらの中央に噴水。
アホなのかこの学校の経営者？こんな景色、中々見られる場所はない。どう考えても学校で見られる場所じゃないはずだ。
とにかく、俺は噴水の前に入学者のクラスを割り出した紙が張り出された掲示板を見ているのだ。走ったせいで乱れた七三を整えながら。
――――ぎ・・・ギリ間に合ったぁ・・・
そう、俺は最低ランクの運動神経をフルに活性化させ（？！）、現時刻８時５０分にここにいる。
クラスを確認すると、１－Ｎ。ちなみに１年は５０人ずつクラス分けされて全部で１４クラスある。
生徒の教室は新校舎にある。
旧校舎には特別教室しかないらしいので、俺もまだよく把握していない。新校舎は、１階から６階まで生徒の教室。７階は教務員室・シャワールーム・保健室・宿直用の宿泊室。地下３階にわたって、図書館となっている。うん、おかしな部分いっぱいあるが、後にしよう。遅刻してしまう。俺は高層ビルみたいな新校舎の２階にある、我がクラスへと向かった。

教室の引き戸を開けると、既に４９人の生徒が耳を塞ぎたくなる程の声で騒いでいた。

待て。待て待て待て。ここは偏差値７０の真面目君のためだけのような学校ですよね？見渡すかぎり、ギャル・ギャル男・ギャル・ギャル男・稀にヤンキー。化け物の巣窟にしか見えないんですが？

教室は空調設備が素晴らしく完備されてる上に、床暖房までついているし、ノートパソコンが机に一人一個ずつ設置してある。この時点ですっごい突っ込みたくなってくるが、それどこじゃない。

―――俺、学校間違えた？

どう考えても全員偏差値足りてないでしょ？落ちこぼれ校じゃねぇのここ？

頭の中でてんぱってると、教室内の生徒が俺に気付いた様で、怪訝な顔をし始めた。

「なにあいつ？」

「あんなの未だにいるんだぁ？キモくね？！」

時代遅れはお前だろマンバ。

「ってかあの七三半端ねぇんだけど！」

そうだろ？半端なく真面目そうでカッコイイだろ？お前とは仲良くなれそうだなギャル男。

「やべぇ。殺してぇあいつ」

そこのＢ－ＢＯＹ！俺お前になにもしてないですけど？！

「はい、全員席着いて」

後ろから声が聞こえて振り替えると、スキンヘッド・眉無し・吊り目の黒スーツを纏った男が。

・・・こいつ担任？！誰のＳＰですかあなた？！

俺の真面目ライフの夢が崩壊していく音が聞こえた様な気がした・・・

第四話『学校』（後書き）

笑う要素が多いこの小説でこの様な報告をさせていただくのは誠に不本意ですが、更新が遅れた理由を告げるため、あえて書かせていただきます。友人が亡くなりました。交通事故で即死でした。明るく、誰にでも態度を変えることなく接しられる、強く器の大きい人でした。彼の御冥福をここで祈らせていただきます。

第五話『初日終了』（前書き）

祝２０００アクセス突破！一話更新毎に６００ものアクセス、大感謝です！評価・感想・意見・要望なども受け付けておりますので、是非お送りくださいませ！

第五話『初日終了』

教室の入り口から見て、3、4、3の順に椅子が用意されていて、その目の前には大きめの白い机。それが5列並んでいる。上下2段になっている黒板の前には、これまた大きめの教卓と黒スーツのハゲSP。

———うん、なにからなにまでおかしいよね。

まず普通の教室じゃないよね。人数から考えたら仕方ないかもだけど、自クラスの机が共用ってプライバシー無視だね完全に。中庭潰してその金こっち回せよ。

それからこの机に置いてあるノートパソコン。なにこれくれんのハゲ？つまりこのパソコン使って授業するから、ノートいらないわ教科書いらないわってこと？宿題は家にパソコン持って帰ってやれって？字書けない子供育ちますけど？

「初めまして諸君。私がこのクラスの担任、猫村繁樹（ねこむらしげき）です」

諸君って言うヤツ、初めて見ましたよそこのハゲ。

———ってか、猫？！猫って顔じゃねぇだろそこのハゲ！

「かわいぃ～！猫ちゃんじゃん？！」

おい、隣のこの年で厚化粧してサバ読んでるおばちゃんみたいな時代遅れのマンバさん。でかい目クリクリさせて血迷ったこと言ってんじゃないですよ？その潰れた鼻もっと潰してやろうか？ぁあん？

「えぇーまず、諸君の目の前にあるパソコンだが、それは一人一台ずつ、支給されるものだ。後で自宅用の充電のコードとパソコンを持ち運ぶソフトケースを配布する。学校からの入学祝いと思い、気兼ねなく受け取ってくれ」

はい、猫ハゲまたおかしなこと言ったぁ！ホントにくれると思わなかったよさすがに、うん。嬉しいけどその触り心地悪そうな頭叩

いてもいいかなぁ？なぁ？！

「諸君は入学式以降、毎日そのパソコンを持って登下校してもらう。だが、数学などパソコンで授業を受けるには限界がある教科もある。そこで諸君にはノートまたはルーズリーフを用意してもらう。教科書は今日配布するが、各自用意されたロッカーに保管しておくように！尚、予習復習等を行う際に自宅に持ち帰るのは自由だが、主に登下校の際に必要なものはパソコンと筆記用具のみだ。これらを忘れた場合にはそれなりの処分があるので注意するように！」

――――なるほどね。

よくできたシステムだ。

小・中とパソコンを使う授業を取り入れる学校も多い世の中だ。

社会に出て真っ先に必要になる技術であるパソコンを徹底的に身につけさせるつもりか。

尚且つ、従来の学業レベルも保つ。

敢えて自由にさせるのは、各自の自主性と向上心を伸ばす為。つまり、面倒だから教科書を置き弁するようなヤツはついてけない、と。

よく考えてるな。中退しても進学しなくても、社会で通用する技術は身につけさせておく辺り、子供のことをよく考えている。これならニートとか少なくなるかもな。ただの無駄遣いしてるアホ学校じゃないってことか。

「さて、ではロッカーの鍵と教科書、パソコンの付属品を配布する！その後、諸君には早速パソコンで簡単なテストを受けてもらう！そのテストが入ったＣＤ－Ｒも配布するので、各自速やかに左隣に回せ！」

猫ハゲは言い終えると早速大量の配布物を配り始めた。

にしてもだ。

この見た目脳みそすっからかんなヤツラはホントにこの学校に受かったのか？中学からそのまま上がってきたヤツが多いかもしれんが、一般で入ったヤツもいるはずだ。一般入試はかなり難しかった。一般入試は見た感じ、がり勉君しかいなかった気がするんだが、彼ら

の姿はここには無い。彼らを蹴落として入学してきたのかこいつらは？そんな天才君達にはとても見えないんだが・・・

テストが終わった。内容は、入試同様の国・数・英のマークシート。パソコンで、表示された問題を次々とマウスで正しい答えの選択肢をクリックして進めていく。終わったヤツから先程配布された教科書を、教室の外に配置されたロッカーにしまって帰っていいということだった。

当然、俺の出来は上々だった。これでも一般入試でこの学校に合格したのだ。しかもマークシート形式なんて、答えが出ているテストなど、俺にとっては猫ハゲに向かって、

「おい、猫ハゲ！猫ハゲはどうして猫ハゲなんだい？・・・死ね！」と言いながら殴りかかるのと同じくらい楽勝だ。・・・それはさすがにやらないが。

学校を後にして、今度はのんびりと歩きながら駅に迎う。ゆっくり景色を眺めると、都心の割に、木々や花々がたくさん路肩にあって、心を和ませる。美しい景色がある街で良かったと心から思う。これで三つ編みの彼女でもいたら・・・

この学校で彼女ができたことを想像してみると、脳内で、この道を隣で共に歩いているのは、頭のイカれた今日隣の席に座っていたあのマンバだった。・・・最悪な妄想をしてしまった。

電車に揺られながら、今日のことを思う。今は１２時近くだから、いくら普段混む電車でも、人がまばらで座っていられる。

―――なんかホント疲れる日だったな。

慣れないことはするもんじゃないなと一瞬頭に浮かんだが、即座に打ち消す。俺は真面目な生活を夢見ていた。さすがに妄想とは違

いすぎていたが、周りの環境や人々など関係ない。俺が真面目に、おとなしく生活できればそれでいい。
もうあんな思いをするのは二度と嫌だった。

地元の駅で電車から降り、今朝のことを思い出した。
――――龍也。
あいつは今朝ここで一体なにをしてた？真面目モードになっていたから、俺に気付かなかった様だが、いきなりカツアゲしてくるとは。そもそも、カツアゲなんてダサい、時代遅れなことなど俺はしたことないし、ヤツに教えたこともない。ヤツのことは詳しく知らないが、ヤツは俺のことを慕っていて、いつも勝手についてきていた。俺が嫌うことをするやつではないから、俺も敢えて突き放すことなく放っておいたが。
バイクで家に着いた所で考えを振り払う。もう俺には関係ないんだ。関わったら真面目ライフがぶち壊しだ。
玄関に入り、靴を脱いで、リビングに入る。

「あんた・・・ホントにその格好で学校行ったの？」
・・・またうるさいのが出てきた。

第六話『初日夜』

月の光が窓から差し込み、自室の青いカーテンを透かしてベッドを照らしている。小学生の頃から使っているベッドは身体に合わなくなっていて、寝返りをするたびに悲鳴をあげる。

月明かりに照らされながら、俺はベッドの上で眠れずに白い天井を見上げていた。

―――疲れた。

そう、疲れている。慣れない生活を送ったおかげで、四肢を動かすのが億劫だ。母の嘆きをシカトして、夕飯に呼ばれてもベッドの上から動けなかった。それくらい疲れている。なのに全く眠れない。

理由は二つ。楽しみにしていた真面目な生活だが、思った以上に疲れた。しかも想像していた状況と違いすぎる。あの環境で俺は理想の生活を送れるのか？不安が、胸の内で、駆け巡る。

もう一つ。龍也だ。俺は大してなにも考えず、あいつに俺の制服を譲った。それは実質中学の頭、いや、県内の頭をヤツに譲ったことになる。今日見たあいつは、県内のトップの姿じゃない。ただの調子こいた悪ガキだ。あの程度のヤツが県内の猛者を抑えることなどできない。　　ため息を吐くと同時に、肺が息苦しくなる。ニコチンを身体が欲している。

―――煙草・・・吸いてぇ・・・

中学卒業と同時にやめた煙草が恋しい。こういう時は煙草を吸うといつも気持ちが落ち着いた。こういう嫌な予感が全身を駆け巡り、イライラと不安が腹の中で暴れている時。煙と共に全てを吐き出すと、少し楽になる。完全にニコチン中毒者だと自覚してしまう瞬間でもあるが。

思えば、俺は求めて中学の頭や、県内のトップに昇り詰めた訳ではないが、ちゃんとその責任は全うしていた。そもそも、降り掛かる火の粉を全て吹き飛ばしていったからその座を手に入れることに

なった。決して、悪いことをしていた訳ではない。むしろ良いことをしていると思っていた。今では悪かったと自覚しているが・・・
一度思考を止めて、母が机に置いていったコーヒーと軽食を盛り付けた皿に目をやる。そして冷めたコーヒーを手に取り、一気に飲み干す。少し苦いが、それくらいが今の気分にはちょうどよかった。
カツアゲされている男子生徒や、ヤンキーにちょっかいを出されて困っている女子生徒（真面目な子だけではなかった）。
それらを目にしたり、噂を聞いたら、即座に行動していた。
そうしたら自然と中学の頭という扱いになり、知らない番号から電話がかかってくるようになり、呼び出しが続く毎日。
でも、決して屈しなかった。
覚えのない因縁をつけられて、頭を下げたくなかった。
呼び出されてボコられても、決して謝らなかったし、手を出すことを諦めなかった。
そうして手にしたのが、県内トップの座だった。
ヤンキーと呼ばれるなら、ヤンキーらしくあるために、努力した。
強ければ、真面目なヤツラが手を出されることはないと思っていたから。上に立てば、そういう行為を止めさせられると思ったから。
俺は、弱者を助ける為に、強者になること、即ち、ヤンキーのトップになって恐怖政治を行うことが正義だと思っていた。
ダルい身体を起こして、ダボGとスカジャンを羽織る。髪の毛をワックスとスプレーでオールバックに固める。
時刻は0時ジャスト。春休みだから駅に行けばいくらでもヤンキーには会えるだろう。
静かに階段を降りて、玄関でスニーカーを履いていると、母がリビングから出てきて、ため息をついた。
「結局、こうなるわけ？」
なんだかんだ言っていても嬉しかったんだろうな。今は苦虫を噛み潰したような顔をしている。
「学校始まるまで我慢してくれよ」

少し苦しい思いを胸の内に留めて、笑ってみせる。もう心配かけたくないから、遊びに行くように見せる為に。
「・・・怪我しないように。事故らないように。あと悠海(ゆみ)が連絡つかないから、探して来るように」
・・・待て。待て待て待て。またかよあいつは！
「わかった」
ため息混じりに答えて、外に出る。スクーターに火を入れて、駅に向かった。

駅に着くと、昼間とは全く違う街が見れた。駅前に並ぶ居酒屋の前で、顔を赤くして談笑しているスーツを着くずしたサラリーマン達。駅の前やコンビニの前に座り込んでいるスウェット姿の若者。
その中でも一際目立っている、単車数台を駅近くのあまり人気がない駐車場でたむろしている、いかにもヤンキーの集団に目を向ける。
――――あれは・・・
見知った顔がいることに気が付いてスクーターを走らせ近づくと、上下黒のスウェットに身を包んだ金髪のニキビ面が俺に気付いた。
「斎藤さん！おひさっす！」
ニキビは年に似合わない低い声を張り上げた。周りのヤンキー達もこちらを見た瞬間、慌てたように頭を下げはじめる。
「ちわっす！」
「お久しぶりっす！」
知らない顔のヤンキーに挨拶されるのはなんとも言えない気分だが、慣れてしまった自分もなんとも言えん。
「うっす。お前、龍也知ってるよな？」
妖怪ニキビに視線を向ける。以前、こいつは龍也と一緒に居るところを見たことがある。
「はい！最近連絡とってないっすけど」

なぜ姿勢を正しながら答えるんだニキビ。
「なんかあいつの噂聞いてねぇか？」
全員を見回す。
「あ・・・」
一人、反応した。土方用のニッカポッカに身を包んだ茶髪。
「知ってんのか？」
少しガンつけながら問い掛ける。
「・・・なんか、斎藤さんが頭譲ったことをいいことに調子こいてるって・・・」
少し気まずそうにニッカ君は答えた。
「例えば？」
すかさず続ける俺。やっぱあいつ・・・
「どうも片っ端からその辺の地味なやつカツアゲしてたり、女あさってるとか・・・」
よくやったニッカ君。
「呼べ」
少しドスを聞かせる。
「え？」
妖怪人間ニキビが突然話を振られた為にまた姿勢を正す。
「今すぐ龍也呼べ！」
「は・・・はい！」
ニキビは慌てて携帯を取り出した。
周りのヤツラは、なんかすっげぇとかやっべぇとか半端ねぇとか騒いでいる。マジうぜぇけどそれどこじゃない。あいつはシメないといけない。これが俺の最後の仕事だ。
「斎藤さん！なんかあいつ今忙しいっつってますけど！どうも女襲うつもりらしいっす！やばくないっすか？！」
なにぃ？！
「場所は？！」
「線路沿いっぽいっす！電車の音聞こえたんで！」

それだけ聞いた俺は、慌ててスクーターを走らせた。

第六話『初日夜』（後書き）

シリアスです。全然笑えない感じに仕上がりました。次回に続きます。評価・感想等お待ちしております。また、小説家になろうで「はじめての×××」という企画が運営されております。神越は今回の参加は見送ってしまいましたが、是非そちらも御覧になってください！

第七話『ボコり』

線路沿いの細い道。蛾などの虫が集まる少し暗めの街灯は、その道を照らすには十分とは言えない。線路と住宅街に挟まれた道は、延々と続いているのではと思う。

―――ヤツの行動範囲で線路沿いと言ったらこの道しかない・・・

俺は焦っていた。今龍也が女を襲ったりなんかしたら、大変なことになる。頭が変わってすぐにそんな事件が起きたら、今は小さい噂でも、あっというまに広まる。

今の頭は能無し。

その事実は、今まで俺がやってきたことの全てを否定することになる。抑えてきた馬鹿共が、恐れる者がいなくなったことをいいことに、また暴れだすことになる。真面目君達に危険が及ぶ。しかも、それは頭をそんなヤツに譲った俺の意志にもなる。今まで以上に無法地帯になってしまう。

スクーターのガソリンメーターが下に傾いているのに気付いて、舌打ちをする。今ガス欠になったら洒落にならん！

左側の住宅街が一瞬途切れて、駐車場が現われた。そこに止まっている一台のママチャリを見つけて、慌ててブレーキを掴む。

荷台のフレームが上に折り曲げられた、シルバーのママチャリ。籠には下品なマークが描かれたステッカー。

―――龍也のチャリ！

隣にスクーターを止めて、耳を澄ましてみると、少し声がする。少し幼さの残る、女の声。この女を狙っている可能性が高い。声が聞こえる方に向かって走りだす。数十メートルも走ってない内に、息苦しくなると同時に胸の辺りが痛くなり始めた。

―――ま・・・だ・・・ヤニが・・・抜けてねぇのか・・・

思考を回転させるのもめんどくさい。あぁ死にそう。なんで俺がこんな目に。マジ誰か殺してぇ。

遠くなっていく全身の感覚。それでも女の笑い声が近くなっていくのがわかる。に、してもだ、この声は毎日聞いている声ですね、うん。
ぼやけた視界を意識的にはっきりさせると、見慣れたワンピースとブーツカットのクラッシュデニムパンツ、綺麗に思える程のストパーをかけた茶髪に、細い眉毛と垂れ目の女が、携帯で電話しながらこっちに向かって歩いている。
はい、悠海ですね。妹です。あのマセガキこんな時間にこんな暗い道一人で歩いてやがる。そして、その背後をニヤニヤしながら歩いているのは――――龍也。
「龍也！」
声にならない声を絞りだして叫ぶ。喉が痛ぇ。
声に驚く悠海と龍也。だが、とりあえず悠海はシカト。横を通り過ぎて、そのまま、龍也を、殴り飛ばす。
「――――っ！」
声になっていない呻き声をあげながら龍也は倒れた。そのまま龍也の身体の上に乗っかって、また顔面に一発。
衝撃による痛みも、血が頭に昇っているせいでさほど感じない。また一発。
龍也は両手を顔の前にかざして、意味のない抵抗をしている。その状態の龍也の胸ぐらを左手で掴み、上半身を起こさせる。
「てめぇ！今何しようとしてた？！ぁあ？！」
近所迷惑なのもシカトして怒鳴り声をあげる。
「ゆ・・・悠樹さん・・・なんで・・・」
龍也はやっと俺だと気付いたのか、目を見開いている。
「なにしてんだって聞いてんだ？！ぁあ？！」
もう一発顔面に。
「ちょ！お兄ちゃん？！」
電話を慌てて切った悠海が、俺の右腕を掴んで止めようとした。
荒い息を少し落ち着かせながら、龍也を解放してやる。力が抜け

ているようで、胸ぐらを離すと頭からコンクリートに落ちた。
よく龍也の服装を見ると、春休みなのにも関わらず、俺がくれてやった学ランを着ていた。
「脱げ！」
眉間に皺を寄せたまま、声を張り上げる。龍也は苦しそうにこちらに視線を向ける。
「上着を脱げ！」
もう一度促す。すると慌てて上着を脱ぐ龍也。
「帰るぞ、悠海」
上着を力任せにひったくって、悠海の腕を掴んで元来た道を引き返す。
「ちょ！お兄ちゃん！」
戸惑う悠海の声も聞こうとせず、俺は悠海の腕を離さずに歩き続けた。

「悠海、お前どこに行ってた？」
スクーターを停めた駐車場に着くと同時に切り出す。
「買い物」
下を向いたまま答える悠海。馬鹿かコイツは？荷物を持たないで買い物から帰ってくるやつがいるか。
「また男の所か？」
悠海は俯いたまま、蚊が鳴いたような声で肯定した。　悠海は俺の一つ下の妹だ。私立の中学に通っている。中学時代の俺とは正反対の真面目な妹・・・ではなく、こいつには、いや、こいつにも普通じゃない節がある。
―――男遊び。
そう、こいつは男遊びがひどい。何股かけているのか知らんが、いつも違う男を連れて歩いたり、男の家に平気で泊まってくる。しかも、ヤンキーに憧れがあるらしい。見かけた時に隣を歩いている

のはヤンキーばかりだ。今時の中学生らしいのからしくないのか・・・

「お兄ちゃん、なんであの人ボコったの？あたしを襲おうとしたから？」

話を無理矢理変えて、少し嬉しそうな笑みを浮かべる悠海。・・・殺すぞこいつ。

「それもあるけどな・・・ってか気付いてたのか？」

「当たり前じゃん。ずっと尾けてきてんだもん。気付くって普通」

はい、おかしいですよねこの人。何襲われそうになってんのに、そのまま暗い道を楽しそうに電話しながら歩いてんの？ホントに殺しますよお嬢さん？

「・・・お前さ、夜中に出歩くときは明るい道を歩け。いいな？」

今時の若いヤツに夜中出歩くなだの男遊びするなだの言ってもしゃあない。せめて、それくらいはと思う注意をしておく。細かいことはお母さまのお仕事です。

スクーターの座席を開けて、半帽のヘルメットを取り出して、代わりに学ランの上着を丸めて突っ込む。

「ほら。ちゃんと付けろよ」

マセガキを後ろに乗せて、家に向かう。あぁ、妹思いの優しい真面目君ってとこですか？

「お兄ちゃん免許取らないの？」

はい、ごめんなさい。無免許です。真面目じゃないです。ハァ・・・

第七話『ボコり』（後書き）

暴力シーン全開でしたワラ　なるべく残酷にしないようにしましたが・・・如何でしたでしょうか？　話は変わりますが、初評価・感想いただきました！ありがとうございます☆彡返信させていただきましたので、そちらも御覧ください！　他の読者様も、評価・感想くださると嬉しいです。。

第八話『入学式・朝』

けたたましい音で叫ぶ我が携帯。ＨＩＰＨＯＰのアラームを決して起き上がる。

あの夜から外出することなく、部屋に引き籠もって文学小説を読み漁り過ごし、あっという間に約１週間。ついにこの日がやってきた。うん、ついに。

――――入学式。

なんだかんだ予想していた学校と違っていたが、この日が待ち遠しかった。

銀縁の伊達眼鏡もこの１週間ずっとつけて過ごしたし、愛車のスクーターも持ち主に返した。

ちなみに、このスクーターが大変だった。どっかのバカから奪ったものだったが、窃盗品だったらしく、警察が家に来てしまったのだ。色んな理由で名が知れてしまった俺。すぐさま警察に連れていかれてしまった。そこで容疑を晴らすのに費やした時間約２時間。おかげさまで小説を読む時間を損しましたさ。

だが、そのスクーターも持ち主にちゃんと戻り（ガソリンは空で）、警察にも七三眼鏡のおかげで改心したと信じてもらえ、龍也はシメたし、もはや障害はない。俺の真面目ライフが、ついに、ついに、今日から始まるのだ！

「はよ」

慣れた調子でリビングに入る。そこで出迎える我が母。

「おはよ。あんたまだその眼鏡してんの？」

呆れた様子で朝食を並べてくれる。

「あぁ。真面目っぽいだろ？」

笑いながら眼鏡を持ち上げてみる。ちなみに、お母さまはやめてみた。ガラじゃないのもあるが、言うたびに薬中扱いされるのはごめ

んだ。
「にしても、あんたまさかまた七三で行くつもり？」
そう、俺が七三で出歩いたのは登校日と警察に呼ばれた時だけ。なので、母しか見ていない。だからこそ、母は二人でいる時にしか注意できない。妹や親父が見たら、薬中扱いされるどころか発狂しかねないから。
「カッコイイと思うんだけどな・・・」
「あんた本気なの？！」
いや、本気ですけどお母さま。

さて、ビシッと学ラン（普通の）を着て、七三に眼鏡。鏡に映った自分の姿を見て、酔い痴れる。今日は中学時代の制服をそれぞれが着て、入学式に出席することになっているから。にしてもだ。あぁ、どっからどう見ても真面目な学級委員だなぁ・・・
「あんた、早くしないと遅刻するわよ？！」
母が焦って声をかけてくる。全く、ゆっくり自分の世界にも浸れん！バイクが無いから、親父が昔使っていたチャリの鍵を手にとって、我が家を後にしようとする。
ちなみに、今日の入学式には保護者は出席しないらしい。ホント不思議な学校だ。
「じゃ、行ってくる」
「そんな格好で行って、カツアゲとかされないでよ？」
・・・もう被害にあってしまいましたけどね！

第八話『入学式・朝』（後書き）

短めに仕上げました。次回、ようやく入学式です！

第九話『車内』

重くなった足を、手摺りに捕まった腕に力を入れて、一歩また一歩と階段を登る。行き交う人々の目が、怪しい者を見る目になっている。

――――なぜ、俺はこんなにもボロボロになっているのか？

答えは簡単だ。

チャリなんかで駅まで来たからだ！

そもそも、原付で常に移動していた俺にとって、チャリを漕ぐ動作は懐かしいものだった。

だが、懐かしさを楽しめたのは、最初の百メートルくらい。

それからは肺が痛いわ足が痛いわもう苦痛以外のなにものでもなかった。あの登校日の猛ダッシュも相当な疲労感だったが、今回のは家を出てすぐ襲ってきた疲れだ。なんかもう帰りたい。今すぐ帰りたい。でもダメだ。俺は真面目。爽やかにチャリで駅まで来たんだ。汗を拭って、爽やかな笑顔を浮かべて、『今日もいい汗かいた』なんて思ってなければいけないんだ俺！

乱れた七三を直しながら、階段を登りきって、改札に向かう。龍也の姿はない。

――――さすがにもうやめたかカツアゲは。

安堵からかため息が自然と出た。

ここからはあいつ次第だ。もう俺は今日から高校生。後はなにがどうなろうと関わってはいけない。跡を継いだという証拠の昇り龍は無くなった。これから名前を売るのはあいつが自分でがんばらなくてはいけない。腐ってる暇はない。カツアゲなんかをしてる場合じゃない。だから今日あいつがここにいたら、殺してるとこだった。

改札を定期で抜けて、ホームに降りると、上り方面は電車を待つ人で溢れていた。
―――なんじゃこりゃぁ！！
予想はしていたが、サラリーマン、ＯＬ、学生の姿が視界に納まりきらない程だった。まだ学校が本格的に始まる前だというのに！なんなんだこの人の数は？！
ホームにアナウンスが流れて、電車が来たことを告げる。線路を車輪が通る音で耳が痛い。そして到着した車内を見ると、人、人、人。
・・・待て。待て待て待て。俺は今からこの電車に乗るんですよね？！オヤジに囲まれたり、ガム目の前でクッチャクッチャやられたり、若い女の人に手が当たっただけで痴漢扱いされるんですか？！嫌だぁ・・・帰りたい・・・
いや、耐えろ俺！これに耐えれば楽しい学校生活が待っている！こんなの1時間くらいの辛抱だろ？！
人をギュウギュウ詰めながら車内にやっと入れたところでふと思う。
―――1時間も耐えるの？！これに？！嫌だぁ・・・帰る！俺帰る！！
ドアが閉まり、俺は人の圧力でドアにベタッと張りつく形になってしまった。

止まる駅、止まる駅で人波に押されて、俺は完全に振り回されながら、オヤジ達の嫌がらせにしか思えない行為に耐えた。
あぁ、耐えましたとも！そして、ついに！あまり被害の少ない車両間通路の付近に非難することができた。そしてため息をつきながらふと通路の中を見ると・・・いました声高子。今日はしゃが子はいなく、高子のみ。一人で座り込んで、呑気に煙草を吸ってやがる。ってか通路の中、人いなっ！マジ空いてる！！誘惑に負け、ドアを開けそうになって正気に戻る。

――ダメだ！ヤツには一度絡まれている！
ここで通路に入ったらヤツに絶対絡まれる。あいつは絶対そういうやつだ。それは相当めんどくせぇ。
目線を車内に戻そうとした瞬間、電車が揺れた。それと同時に横っ腹に衝撃を受ける。
――やっべ、視線が変えらんねぇ！！
通路のドアに押さえつけられて、顔の向きが変えられない。ふと、高子がこっちを向いた。笑った。手を振り始めた。

――はい、シカトぉ！！！
思いっきり顔は高子の方を向いているが、目線を明後日の方向に向けて抵抗する。ってか、あいつ！こないだあそこまでしたのになんで笑って手を振れる？！バカか？バカなのか？！
「おはよ！七三君」
いきなりドアが音をたてて開いたと同時に高い声が・・・って待て！顔が摩擦で痛ぇ！！
「混んでるんだからこっち来なよぉ？背ちっちゃいから大変でしょ？」
殺していいですか声高子？
「ほら早くしろってぇ？」
無理矢理腕を引っ張られて通路に入れられる。背後からの視線が無性に気になったが、どうすることもできない。結局、俺のシカト大作戦は無駄な抵抗に終わってしまった・・・

「おはよぉ、七三君」
通路に座り直した高子が改めて挨拶してきた。なんかもう・・・突っ込みきれない。とにかくこのピンチを脱出――できねぇか・・・
「・・・お・・・おはようございます」
諦めてギャルに絡まれた真面目な七三君を演じきることにした。

「今日は入学式？あたしもなんだぁ」
・・・こいつタメだったのか。
「・・・そうですか」
「皐月(さつき)はバッくれてさぁ。あ、こないだの子ね。だから一人でつまんなかったの」
だからって俺に絡むな！！
「・・・そうですか」
「で、鬼人さんはなんで七三眼鏡なんて格好してるの？趣味？」
「・・・はぁ？！」
待て！待て待て待て！こいつまだ疑ってたのか？！

第九話『車内』（後書き）

更新遅れて申し訳ありません・・・しかも入学式にまだ入りませんでした・・・　今回は長くなったので、あえて中途半端に切ってみました。・・・いかがでしょうか??

第十話『再会』（前書き）

ずいぶん久しぶりに更新しました。仕事が忙しすぎるもので・・・・
待っててくださった読者様方！申し訳ありません！愛してます！！
ワラ　　結局入学式は次回になってしまいました・・・

第十話『再会』

うん、よく考えようこの状況。
まず、電車の車両間通路に座り込んでますね、はい。
隣に座って、でかい目をこっちに向けて微笑んでる人がいますね。
はい、声高子さんです。
　さて、問題です。このお方は今なんとおっしゃったでしょうか?!
「ねぇ鬼人さん?眼鏡似合うねぇ」
・・・
　馬鹿みてぇにアハハとか笑って爆弾発言してんじゃねぇ!!
　とりあえず。
　否定してみよう。がんばれ悠樹!お前はできる子だ!
「・・・あ、あの!鬼人ってなんですか・・・?」
できたぞ俺ぇ!見事にとぼけてしまいましたよ俺ぇ!!
「斎藤さん?」
「はい、なんでしょう?」なんだ突然。
「下のお名前はぁ?」
「悠樹ですが」
それがどうした馬鹿。
「出身中学は福田西ですよね?」
「はい、そうですが」
なにを関係ないことばっかほざいてんだ。
「原田茜って覚えてませんかぁ?」
ん?そういやぁ・・・いたなぁそんなやつ。小学校の頃同じクラス

で、私立の中学に行っちまった地味な女だったな。
ん？茜？最近聞いたなその名前。
「やっぱ鬼人さんだったね。久しぶり、斎藤さん」
高子、いや、茜の満面の笑みは、殴りたい程だった。

「で、その格好はどうしたわけぇ？」
やっと分かった。こいつがやたら食い付いてきた理由。空気読めないナンバーワンだったこいつは、未だに相当なＫＹらしく、久しぶりに同級生を見て嬉しくなったのだろう。大して喋ったこともなかったのに。全く、いい迷惑だ。
「ねぇってば。なんでヤンキーやめちゃったのぉ？」
しつこいなこいつ。
「別に。なんとなくだよ」適当に返事しながら、まだこいつ降りないのかと考える。こいつの学校はたしかあと2駅くらいだったか？

人がうざったく思ってるのも知らず、話し相手ができて嬉しそうにしてやがるこの女。なんか微笑ましいっちゃ微笑ましい。
「で、高校ではやんないのぉ？全国制覇ぁ」
前言撤回します。バカすぎて微笑ましいを通り越して崇めたいです。
「高校ではってなに？ではって。中学でもそんなことやった覚えねぇけど？」
「だって県内統一したって。全国制覇の手始めに」
・・・まぁたしかにしたけどさ。
「別にやりたくてやったんじゃねぇよ」
つってもそんな簡単にできることじゃなかったけど。
「ってかさぁ、斎藤さんってなんでヤンキーやってんの？小学校の頃とかたしかに悪ガキって言われてたけど、そんな感じじゃなかったよね？」
・・・うん、驚いたね。まさかそんなこと言われると思ってなかっ

たからね。普通に首傾げてニコニコしているこの人を俺は一瞬、神だと思ったねマジで。
———っと。浮かれすぎて何言おうか考えてて気付かなかった。俺が入ってきた方とは反対のドアから、いかにもガラの悪いB系の兄ちゃんがガニ股で入ってきた。しかも3人。ってかこいつら何年前のセンスしてんだ？一番前のヤツなんか真っ青のジャージにダボGだぞ？しかもヤンキースのキャップって！
「おい、なんかキモイ七三がいんだけど」
時代遅れの兄ちゃんがいきなり吹き出した。
「ってかその子カワイイじゃん？ねぇアド教えてよ？」
すぐ後ろの革ジャン着た兄ちゃんが言う。ってかこいつ風邪ひいてんのか？声しゃが子よりしゃがれてんぞ？しゃが男だな。
「斎藤さん・・・」
高子が不安気にこっちを向く。煙草を持つ手が震えてる。
マジかよこの展開。マジですかこの展開。俺これから入学式なんだけど？
「お前向こう行ってろ。どうせ次降りんだろ？」
溜め息を軽くついて高子を跨ぐ。さっき感動している時に1駅過ぎた。こいつらはその時乗ってきたんだろう。
「うん、ありがと！またね？」
高子はサブバッグを持って通路から出ていった。
ってか少しは戸惑えよ！当然の如く逃げやがって！神どころか悪魔だなマジで！
「なにカッコつけてんだよ七三君」
ニヤニヤしてんじゃねぇよ。ったく・・・もう喧嘩しねぇって決めたのになぁ・・・
何も言わず、いきなり握り締めた拳を青ジャージ男の顔面に繰り出す。油断していたヤツの鼻に直撃して、鼻から血が垂れ始めた。うわっ、手に鼻血ついちまうじゃん！最悪だよ・・・
「まだやんのかよ？」

鼻血が嫌だから脅してみる。
「てめぇ！」
後ろにいた革ジャンが、もたれかかっている青ジャージを押し退けて、こっちに向かってくる。
・・・すかさず前蹴り。狭い通路で大振りって・・・バカじゃね？
「――っ！てめぇ・・・」
革ジャンは丈夫だった。青ジャージと違って。ってか一番後ろの緑のボーダーのポロシャツ君は目立たないねぇ・・・
「おい！こいつ鬼人だ！」
あ、喋った。ってかなんでわかったの？あ、眼鏡外れてた。
「マジか？！一個下の？！やべぇな・・・」
「――とりあえず逃げんぞ！」
・・・逃がさねぇよ！
俺はなんだかんだ言って喧嘩が好きなのかもしれない。
結局、３人をボコボコにしてる間に池袋に着いて、駅員に追い掛けられながら学校に向かうはめになった・・・
恨むぞ高子・・・

第十一話『入学式？』（前書き）

更新が大変遅れて申し訳ありません。あとがきにてお知らせがありますのでご覧になっていただけると助かります。

第十一話『入学式？』

はい、走ってます。俺今めっちゃ走ってます。肺が痛い。脇腹が痛い。足が痛い。

なんで俺がこんな目に合っているか？はい、全て声高子のせいです。

息が荒れ、散り始めた桜の花びらが体にまとわりつくのも気にせず、必死に走る。ふと、携帯を走りながら取り出して、時刻を確認。

・・・やばくね？駅員なんかに追っかけられたせいで、俺は今、楽しみに楽しみにしていた入学式に・・・遅刻しそう。

時代遅れの格好をしたバカ3人をボコボコにした時、俺は全く気付いていなかった。

今思い返すとホントバカ。

あんな大勢人が乗ってる電車の中で、あんな派手に喧嘩したら、そりゃ車掌が出てくるわ。

終点間近でやっと人を押し退けながら車両間通路に辿り着いた車掌を発見した俺は、速攻逃げた。

うん、捕まったら退学だからね。じゃぁ喧嘩すんなって話なんだけど、そこは高子のせいだわ。　で、人をかきわけながら終点に辿り着くまで逃げ続け、着いた瞬間駆け降りて、ホームから脱出。何故か追走に参加してきた駅員2人。マジ走りでここまで逃げ続けた俺。後ろを振り返ると、駅員の姿は・・・ない。今日学ランでホント良かった。次からは私服だからバレないはず・・・だよなぁ・・・

全力で走りきって校門を通ると、ちょうどチャイムが聞こえてき

た。時刻は8時55分・・・予鈴か！
既に講堂に移動を始めている上級生らしき生徒達を横目で見ながら、新校舎に入り、階段を駆け上る。エレベーターが設置してある我が学校の新校舎。そんなの使ってる余裕はねぇっつうの！

――またギリギリかよっ！
息を荒くしながら教室に入ると、まだ猫ハゲは来てなかった。肩を上下させながら席に着いて、すかさず七三セット。
「うわっ、なんか興奮してんだけどこの七三！キモいー！！」お前がキモいんだよマンバ。朝から隣ででかい声出すな！

呼吸を整えながらサブバッグを床に置いて、目を閉じて猫ハゲを待つ。しかし、こうしていると、教室中の会話が聞こえてくる。

「こないだ別れた元カノがさぁ、なんか未練タラタラみてぇでめっちゃメール来るんだけどー・・・」
「なんで別れたん？」
「向こう5股かけてやがってさぁ。ムカついたから別れた」
「そりゃぁ別れるよなぁ」
「俺は8股かけてたんだけどねぇ」
――おい。最悪だなお前。
「うん、死ねお前」
――友達ひどっ！他に言い方あるだろ？！しかも冷めた声で言うとリアルに聞こえる！同感だけどさ！

「なんかこないだ買った化粧品さぁ」
「あぁメールで言ってたやつ？！」
――メールで言ってたってなんだよ？！書いてただろ？メールなんだから！
「そうそうー。

なんか肌めっちゃスースーするんだよねぇ」
「なんて化粧品？」
「エタノール？だっけ？」――――それ薬品ですよね？
「あぁ！あれスースーするよねぇ！」
――――お前も使ったことあんのかよ！

心の中でどう考えてもおかしい会話にツッコミまくってたら教室のドアが開いた。そして入ってきた猫ハゲ。何故か入学式でもグラサン。
「よっし！諸君おはよう！今日は入学式なので講堂に移動する。すぐに移動して指定の席に座るように！以上！」

・・・それだけ？！
早々と教室から出ていった猫ハゲに続き、移動を始める生徒一同。それに続いて俺も教室を後にした。疑問が相当胸の内を駆け巡っているがしょうがない。楽しみにしていた入学式がぶち壊しになる予感でいっぱいな俺だった・・・

およそ二千人を収容できると言われている講堂。学年とクラス別に席が分かれていて、最前列に教師、三年、二年、そして一年が最後列に座ることになる。ってか主役が一番後ろって！
ガヤガヤと生徒達が雑談を続ける中、壇上に上がった冴えない校長が話を始めた。

「えー入学式を始めます・・・皆さん入学おめでとう！三年間勉学に励み、楽しい学校生活を送ってください・・・以上！」

・・・うん、開会の言葉も兼ねて校長の話終わっちゃったね・・・ってか移動？！皆移動始めちゃったよ！もう入学式終わり？！新入生挨拶とかは？！おい！！！

第十一話『入学式？』（後書き）

えー入学式です。散々引っ張ってこんな感じですいませんワラ
さて、お知らせです。アクセス数が一万ヒットを越えました！！どうもありがとうございます。そこで、他の作者様を見習って、特別企画を行いたいと思います。本編が全く進んでいませんが、なにか番外編でも書こうかと・・・で、読者様方に希望を取りたいと思います。読みたい話等を簡単でいいので、感想・メッセージ等でお知らせですすください。なんでも結構です。締め切りは次話投稿まで。なにも意見がなかった場合は神越が勝手にやりますワラ　以上お知らせでした。

第十二話『衝撃』

教室に戻った俺達。しかし、俺のテンションは最悪。
原因はさっきの入学式。真面目な俺は、どの学校でも恒例の校長の長い話とか祝電とかを真面目に聞こうと思っていた。ってか結構楽しみにしていた。今までなんかの式とかは全部バックレだったから。
思わず溜め息をついて、机に突っ伏した。あんなの有り得ないだろ普通。開会の言葉も無ければ、校長の話だって一分もかからなかった。つーか閉会の言葉すらねぇし！校内放送で十分だろあんなん！
扉の開いた音が聞こえて、顔をあげたら猫ハゲが入ってきたところだった。すかさず、姿勢を正す。俺って真面目！
「諸君、校長の有り難い程短い話はどうだった？」
猫ハゲがこっちを見回した。まぁそういう意味では有り難いな。俺にとっちゃ最悪だけど。
「さて、早速だが、学級委員を決める。その後、その他諸々を学級委員に決めてもらう。立候補いるか？」
来たー！俺の夢！学級委員！！！やばい、マジやばい！早く手上げねぇと！
「はい。あたしやります」
声が聞こえた方に顔を向けた俺は、マジビビった。ビビりすぎて椅子から落ちそうになった。
第一印象。カワイイ。肩にかかる程度に伸ばした、少し赤みがかっている黒髪。決して大きくないが、はっきりとした目と二重瞼。シャープな鼻筋。柔らかそうで、小さい唇。
少しタイプと違うが、化粧も薄めで、十分守備範囲！あの子が俺の・・・パートナー・・・やばい、マジやばい！
慌てて手を上げる俺。だが・・・

「男子と女子は一人ずつ。女子は・・・悪い、名前は？」
「設楽です」
「ん、女子は設楽で決まりだが。男子、お前ら誰か一人に絞れ。」
周りをもう一度見渡す。ん、十何人は手を挙げてるよね・・・殺すぞコイツラ！窓際のヤツなんて学級委員て面じゃねぇだろ明らか！こっちにガン飛ばしてんじゃねぇ！
「先生、学級委員なんて成績でいいじゃん。こないだのテストで一番の男子でいいんじゃね？」
近くのホス系のイケメンが気だるそうに言う。こいつは手を挙げてない。ん、友達になりたいな。いいこと言ったよ、うん。
「じゃぁ諸君、パソコンを開きたまえ。インターネットを開けると、我が校のサイトに飛ぶはずだ」
・・・なんか猫ハゲがサイトとか言うと違和感あるな。
「で、我がクラスのページがあるのでクリックしたまえ。そこにこないだのテストの結果が載せてある。上位三名の点数は公開してあるが、それ以外はログインしないと見れない様にしてある。パスワードはそれぞれの生年月日だ」
・・・あれ？一位はさっきの設楽さんだよね？俺の名前・・・上位に入ってないんですけど・・・？
「一位は設楽。じゃあ男子の一位は総合二位の村田だな。では学級委員は設楽と村田に頼む！」
――待て！何かの間違いだ！俺が上位じゃないなんてありえねぇ！だってケアレスミスがなかったら満点ぐらいの勢いだったんだぞ？！
慌ててログインして見た俺の点数は・・・
「諸君！さすがに我が校に入学するだけあって優秀だ！平均点は２８０点だった！内、平均を大きく下回ったのは一名のみだった！今後も勉学に励むように！」
その一名は俺ですか？！２５０点の俺なんですか？！５０位の俺なのかぁ？！

第十二話『衝撃』（後書き）

前回募集した企画は、お便りをくださったEさんの希望をとりいれて作成します。こんな不定期更新の駄作に、お便りありがとうございました！

番外編～１４の冬～１（前書き）

番外編です。テーマは悠樹の初恋？です。続きます。

番外編～１４の冬～１

あれは冬。うん、すごい寒くて、吐く息が煙草の煙と混じって真っ白だった。

少し膨らみ始めた胸を、直にサラシで締め付けて、その上に白い特服を着ているだけだから余計に寒かった。

でもそんなことも、その辺のバカな男がパクって来てくれた原付に乗ると、忘れてしまった。渇いた空気の中響くエンジン音の大合奏。

色鮮やかな刺繍のお披露目会。

私の・・・楽しかった中学時代。それをぶち壊したと同時に、初めての感情を与えた鬼人との出会いは、中二の、寒い、冬の日だった・・・

「おい！聞いたかよ！？」　毎週土曜日のお祭り。私が所属していた族。県内でも屈指の力と名声を持っていた、乱仏（らんぶ）。やはり首都圏といえど、山奥に行けば行くほどヤンキーの数も力も増えていくものらしい。

「なにが？」

冷たく返事を返す。私の原付をパクって来てくれた、バカな男・牧は、集会の度に私やノリといった同級の女に話しかけてくる。あまりにも下心丸出しだと、やっぱり少しヒく。

「鬼人だよ！出たんだよまた！隣町のラグーンがやられたんだよ！！」

ラグーン。うちにもすぐちょっかい出してくるギャングだ。いわゆるカラーギャングで、皆緑色の服や装飾品で色を統一した、不良集団。大体３０人くらいのメンバーで構成されている。しかもほ

とんどが高校生だったはずだ。
「鬼人ってうちらのタメらしいじゃん？しかも必ず一人で喧嘩に来るんでしょ？」
ノリが目を輝かせて牧に聞く。細いノリの目は、鬼人の話になるとこれでもかと大きくなる。噂で聞いただけで見たこともないのに、憧れの存在らしい。
「なんでも噂を聞いたラグーンが確かめに鬼人の地元に行ったらしいんだよ」
牧は大きく煙草の煙を吐き出しながら始めた。
「ところが鬼人の噂は聞くけど当の本人は見付からない。飽きた奴らはカツアゲした金でゲーセンで遊んでたらしいんだ」
「現地調達？」
ダサい奴らと思いながら一応確認してみた。
「もちろん。でもそれが鬼人の怒りを買ったらしい。後日、一人、また一人とラグーンのメンバーが音信不通になっていった。調べると皆入院してたんだ。頭の柏原がそれに気付いたときには十人も病院送りにされた後だった。」
「やばすぎじゃん！超カッコイイ！！」
ノリは甲高い声をあげた。やばいはやばいけど都市伝説みたいだなぁと思うのは私だけ？
「当然柏原はキレて、返り討ちにするつもりでメンバー全員で固まって行動してたらしい。そしたら昨日、鬼人が来たらしいんだ」
いや、一対二十でどうやって勝ったの鬼人さん。化け物どころじゃないでしょそれ。
「さすがに鬼人も二十人には勝てなかったらしい。十人倒した時点で血まみれでフラフラだったって」
いや、あんたさっき潰したって言ってたじゃん！しかも誰から聞いたんだよそれ！明らかに横で見てた人いるよねそれ！
「カッコイイ・・・」
ノリさん？！頬を赤らめるとこ今あった？！

「そしたら鬼人は倒れちまって、散々奴らにボコられたんだと。でもな、すっげぇんだよこの後が！もう死んじまったんじゃねえかって時に、鬼人は立ち上がってまた一人ずつぶっ飛ばしてったらしい。殴られようが蹴られようがそれこそドーグでやられようが少しも怯まなかったらしい。で、最終的にビビった奴らは逃げちまって、捕まった柏原は病院送り。実質ラグーンは壊滅だな。一人に全滅させられたチームなんてもうこの先でかい顔できないからなぁ」

笑っているはずの牧は複雑な表情を浮かべていた。

「うちもやばいかもね」

牧の心中を悟って口に出す。そんな化け物にいくら数で攻めても勝てる気がしない。もし目をつけられたら、いくら乱仏でも、負けるかも・・・そんな不安を覚えさせられた、牧の話だった・・・

「バカ野郎！！」

うるせぇ怒鳴り声をあげているのは、疎ましき我が担任。愛称ちゃびん。はげちゃびんからとってちゃびん。ちなみにここは土手。平日の真っ昼間である。

「斎藤！その怪我のことはなにも聞かん！」

じゃあいいじゃん。

「なんでそんな怪我で、こんなとこにいるんだ！？病院に行け！今すぐ」

そっちか、と溜め息を吐く。

「怪我してるからここにいんだよ。家帰ったらまたうるせぇし。学校なんか体痛ぇから行きたくねぇし。血は止まったから病院なんか行かねぇでいいよ」

手をあげて止血に使っていたタオルを見せる。

「斎藤。お前ケンカが好きか？」

いきなりなに言ってんだこいつ？

「好きなわけねぇだろ」

「じゃあなんでケンカばっかするんだ？」
・・・
「関係ねぇだろ」
　話してもわかってもらえるわけねぇ。俺がやってんのは偽善だ。正義のヒーローごっこ。頼まれたわけでもねぇし、仲が良い奴が被害者とかそういうわけでもねぇ。
　ただ、話を聞いて、気にくわなかった。
　放っといたら被害が増えそう、だから俺が潰す。それだけ。
　でもそんなの話しても誰も理解できないし、鼻で笑われるのもわかってる。
　それでも。俺は。やめない。やめちゃいけないんだ。
「中学だからまだいい。退学処分はないからな。悪くて転校だ。ケンカ以外は普段の生活態度も悪くないからそれもなんとか避けられている」
　ポツポツと雨が降り始めた。俺のひなたぼっこが・・・
「高校に行ったらどうするんだ？すぐ退学になる！それどころか今捕まったら高校じゃなくて鑑別行きだぞ？！少年院行きだって有り得るかもしれん！・・・聞いてるのか？！」
　ぼーっと空を眺めていたら急に怒鳴られて意識が戻ってきた。
睨みをきかせながら立ち上がる。
「放っといたらいいだろ？他の奴みたいによ」
「なっ・・・」
「あんたに迷惑かけなきゃいいんだろ？わかってるよ」
　言い捨てて煙草を口にくわえると、切れた唇が染みて顔をしかめた。
「斎藤！」
「帰るんだよ。家で寝る」　　火をつけると、甘いような芳ばしい臭いが俺を包みこんだ。

～14の冬～2

家に帰った俺を待っていたのは、鬼だった。
「おはよう、悠樹」
優しい声で迎えてくれた母。表情は声と裏腹に怒りが滲出ていた。
「ただいま・・・そしておはよう」
とりあえず挨拶してみた。
「あんた何時だと思ってんの！おはようじゃないわよ！」
逆効果だったらしい。ってか自分が先に言ったんじゃん！
「学校は！？その怪我は！？なんで昨日帰ってこなかったの！？うちは夜遊び禁止！」
はい、質問の嵐です。聞きたいんだったら答える間を与えてください。
「ホントにあんたって子は・・・親に心配かけてばっかで！このクズが！」
――子供にクズ言う親って！どっちがクズだ！
まぁいつもの如く非常にめんどくさいのでシカトして二階へ上がろうとする。
「待ちな！」
母の制止にうんざりして振り返るとコンビニのパンを投げつけられた。
「それ食って寝な！学校には連絡しとくから。あとクスリだけは――」
「やってねぇし、やらねぇよ」
鼻で笑いながらパンの袋を開けた。

自室に入り、ベットに寝そべると身体中が悲鳴をあげた。あまりの痛みに少しうめき声をあげてしまった。
痛みと一緒に、昨夜の記憶が甦ってくる。

「おらぁ！！」
迫り来る鉄パイプを、痛む腕で防ぎ、骨に凄まじい衝撃が走るのを感じながら、必死で距離を取ろうともがく。
事の始まりは数時間前、俺は先日から狙いを定めていた、とあるギャングの本拠地である市内をブラついていた。
コンビニの駐車場なんかにたむろしている若いヤツを見つけては、声が聞こえる距離まで近づき、煙草に火をつける。そうして、煙草を吸ってるフリをしながらの情報収集は、俺の活動において、非常に効果的なのだ。
「そういやぁよぉ」
「あん？」
茶のニッカポッカに、白のタンクトップを合わせ、そのむき出しになった腕は、まさに筋肉の鎧に包まれている・・・と言えば聞こえがいい、要は職人風の金髪の兄ちゃんが、同じく黒のニッカポッカを履き、黒のTシャツを着た、黒髪の兄ちゃんに話を振った。しかし、黒づくめの兄ちゃんだな、おい。
「お前、知ってっか？」
「あん？」
――早く話進めろよ。
「ラグーン・・・やばいらしいぜ？」
――来たねぇ・・・いきなり当りか？
「あぁ、中坊にナメられてるってやつか？」
「ナメられてるってか、戦争中？みてぇな」
――中坊1人対ギャング1チームは戦争じゃねぇだろ？まぁ、俺は戦争ってか潰す気満々ですけど。

「ガキ相手に何やってんだかな。しかも何人か病院送りだろ？」
「あぁ、マジダセェよな？まぁ、あいつらもうちのチーム程気合入ってねぇからな。仕方ねぇけどよ」
「その癖、因縁つけてくっから面倒くせぇわな？」
―――こいつら・・・ひょっとして、乱仏か？この街で、他にでけぇチームっつったら・・・あの乱仏しかねぇよな・・・
「でよ、ラグーン。今日辺り、その中坊がまた来んじゃねぇかってよ、例の廃倉庫で張ってんだってよ？」
「マジかよ！鬼人？だっけか。そこまでしねぇと勝てねぇんかよ？！」
―――廃倉庫・・・何人ぐれぇ後残ってんかよ？今日でまとめて潰せりゃ楽だけどな・・
「たかが中坊って思っちまうけどよ？たかが中坊が、仮にもギャングを敵に回すか？」
「あー・・・たしかに・・・まぁ、とりあえず見てみてぇわな、鬼人さんをよ？」
そう笑い合いながら、互いに煙草に火をつける、職人達。美味そうに煙を燻らせているその背後にそっと近づいて・・
「お兄さん達？」
声を掛けてみた。

そっから先はいつも通り。今日の場合は、向こうも敵対チームのことだからか、素直に場所を教えてくれた。んで、倉庫でたむろってるこいつらに、いきなし殴りかかった俺。が、その場をよく見渡すと・・・緑っぽい感じのヤツが約２０。若干冷たい汗が流れたが、もう遅い。もう少しよく見てから突っ込むべきだったと後悔しながら、今に至る。
「おう、どうしたクソガキぃ！あん？！」
罵声を浴びせながら殴りかかってくるのは、緑色のバンダナを腰からさげた、Ｂ－ＢＯＹ。その拳を避けようとすると、足に力が入ら

ず、踏ん張り切れなくてその場に崩れ落ちる。
そこから先は、まさに袋だった。痛みも感じなくなるほど、殴られ、蹴られ、自分の血が、まるで水溜りのように広がっていくのと同時に、意識も遠のいていく。
「うおーっし。まぁ、こんくれぇにしとくか！」
先ほどのバンダナ男。髪は虎刈りで、右側をライン上に緑色に染め上げている。切れ長の瞳が、嬉しそうだった。
「柏原さん！お疲れっす！」
緑色のTシャツを緩く着た兄ちゃんが、ライターに火をつけている。それを見たバンダナ男こと、柏原は煙草を咥えた。
「まぁ、こんだけ血塗れになってりゃ、十分だろ。少しは評判も落ち着くわ」
柏原は、煙を燻らせながら、倉庫内の廃材に腰掛けた。
「っとによぉ・・・どっかの馬鹿共のせいで、うちの評判ガタ落ちだっつーの・・・こんなガキにやられやがって・・・たしかに強ぇけどな。タイマンでも負けねぇだろ。中坊だぜ？」
笑い声が巻き起こる。といっても、立ってるのは数人。残りは、俺が鉄パイプなり、角材なり、拳なりで黙らせてある。・・・よく笑えんな、てめぇら？
――もうちょっと・・・だから・・・もう一踏ん張り！
ゆっくりと、遠のいた意識を覚醒させて、痛む足に力を入れていき、立ち上がる。周囲の雑魚共が、ざわめきと同時に、怯えた表情を浮かべた。
「てめぇ・・・クソガキ！死ぬぞ?！おとなしく寝てろ！」
柏原が怒声をあげながら近寄ってくる・・・が、
「うおっ！」
俺の右ストレートがヤツの身体を殴り飛ばし、黙らせた。
「な、なんだよこいつ・・・」
「なんで、力入ったパンチ出せんだよ・・・？死にかけじゃねぇかほとんどよぉ・・・」

雑魚共の泣きそうな表情・・・ウケるわマジで。元気出るわぁ・・・
すぐさま、一番近いヤツの懐に入り、ショートアッパーを腹部に叩き込み、屈んだ瞬間、顎に膝蹴りを入れて、沈黙させる。そこで、他の雑魚共に大きな変化があった。
「む、無理だ！殺されるぞ？！」
「逃げろ！チーム潰される！」
「おい、誰か柏原君叩き起こせ！」
「柏原さん！起きてください！逃げましょう！」
――――情けねぇな、おい。
ゆっくりと、痛む足を引き摺りながら、柏原に近づくと、必死に声を掛けていたヤツが悲鳴をあげて、走り去った。
「て・・・てめぇら・・・逃げんな・・・」
意識があったのか、柏原が、小さい声でボソボソと言っている。が、そんなもん喝にならんわ。
「ぐぼっ！」
思いっきり、腹に蹴りをかまして、近くにいいもん転がってないかなぁとか思いつつ、蹴りを重ねていく。段々、ヤツの口から、胃液のような血のようなものが垂れてくる。
「ガキガキうるせぇっつの。このクソが！」
結局。凶器（ドーグ）使う必要も無し。止めに顎を蹴り砕いたら、泡を吹いたので、そこで止めてやった・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6296d/

逆高校デビュー

2010年10月12日02時19分発行